

問題

次の文章を読み、あとの問に答えよ。

(50点)

☒ チェック

1 中比、東の京に、たよりなきわかき女ありけり。＊かたのやうなる宮づかへなどしけれど、さしあたりて身をたすくばかりのはかりことにもあたらずのみすぎゆきける。かかるまに、月ごとに初瀬の観音にまゐりて、さまざまにぞ身をうれへ侍りける。かくて、三年の冬にもなりぬれど、さらにそのしるしなし。さすが、たやすからぬ＊道なれば、いよいよそのふところもせばくぞなりまさりける。また、世の中のならひなれば、1人も口やすからずもてあつかひけり。

問二

5 さて、この女、「さのみは道のようにも、しあふべくもあらざりければ、このたびまゐりて、身のほどもうれへはて侍りなば、いまはさてこそはやみなめ。人のいふもことわりなり」などおもふよりまだきに、かきくらされてぞ悲しくはべりける。さて、いつよりも心をととのへてまゐりにけり。「2このたびはかぎりぞかし」とおもふに、あやしの本草までも目にかかりて、aかきくらさるる事かぎりなし。

15 さて、その夜、涙をかたしきて、御前にうたたねともなくまろびふしにけり。夢のうちに、僧の、いみじくたうとく、年たけ、徳いたれりとみゆるが、いでき給ひて、「あはれにおもふぞよ。3うめしくなおもひそよ。そのあとのかたにふしたる女房のうす衣を、bやをらとりてきて、はやくおきてかへりね」とおほせらるるありけり。夢さめておもふやう、「あさましのわざや。はてはては、人の物ぬすむほどの身の報はらにてさへ侍りけるよ。たとひとりたりとても、衣一つはいくほどのことかは侍るべき」とは思ひながら、「さりとは、4やうこそはあるらめ。さばかり身をまかせてまゐり侍らんかひには、たとひ見つけられていかなる恥をみるとても、それをだにも仏の奉公にこそはせめ」など思ひて、あとのかたをみるに、まことに衣ひききていねたる女房あり。やをらひきおとしてとるに、cさらなり、仏の御はからひなれば、

問二
文脈を踏まえて傍線部を解釈する

問三
言い換えられている内容を押さえる
文脈から適切な語を補って訳す

なじかは人もしらむ。

さて、とりて着て、dやがていでにけり。むねうちつぶれて、わびしくもかなしけれども、ねんじかへして、初瀬川のほとまでいでにけり。問五うしろに物いとものしりてきければ、「あなかなし。5さればこそ」とおもひてみれば、この事あやむべき人にはあらで、馬にのりたるもののあまたまかり出でけるなるべし。

さて、この馬にのりたる男のいふやう、「あのさきにみゆるは、女房にておはするにこそ。いかに夜ふかくはただひとりいで給ふにか。衣など着たるは、ことよろしき人にこそ侍るめれ。あれとどめ聞こえよ。馬にのせてあからん所までおくりきこえん」といひけり。さて、供の男、はしりつきて、このよしをいひければ、そら恐ろしけれども、ただ仏をたのみて、「さらばさよ」とて、のりにけり。夜もほのめきて、問六人かほみゆるほどにて、この女をみれば、わがあさからず思ひしものの、病にわづらひてうせにしに、つゆもたがはず。よろこびて具してゆきにけり。

問六男は美濃の国の、人にあふがれたるものにてぞ侍りける。何事もとしき事なかりけり。さて、この女をまたなくいみじきものと思ひて、年月を送りけり。
(「閑居友」より)

注 * 中比Ⅱそう遠くない昔。 * かたのやうなるⅡ型通りの。世間によくある。 * 道Ⅱ観音参りへの旅路。

問一 傍線 a ～ d のここでの意味を記せ。(12点)

問二 傍線 1 の解釈として最適なものを次の中から選び、記号を記せ。(4点)

A 世間の人々も心配して女に親切な言葉をかけた

I 世間の人々も女の身辺について気安く口にしないようにしていた

ウ 世間の人々も口汚く女についての悪評を立てた

問五 文脈を押さえる

問六 古文の典型的な展開を踏まえて読む

問一 文脈に沿って語句を訳す

工世間の人々も女に同情していろいろと世話をした
才世間の人々も不安な気持ちで女と接した

問三 傍線2を、言葉を補って口語訳せよ。

問四 傍線3・4を口語訳せよ。

問五 傍線5で、「女」はどのようなことを思ったのか、具体的に説明せよ。

問六 「女」は最後にはどうなったのか、経緯を明らかにして九十字以内で説明せよ。

出典

『閑居友』 卷下 五「初瀬の観音に月まゐりする女の事」

『閑居友』は鎌倉時代、承久四（一二二二）年に成立した仏教説話集で、作者は慶政^{けいせいしやうにん}上人と言われる。ある高貴な女性のために書かれたものとされ、女性を主人公にした仏教説話が多く収められている。

とくに下巻はほとんどが女性を主人公とする話で、女の愛憎の深さを説いたものや、問題文のような、信心深いために幸せをつかむ女の話などが集められている。

解答

問一 a 涙で自然と目の前が暗くなる

b そつと

c 言うまでもなく

d すぐに（別解）そのまま

問二 ウ

問三 今回で初瀬に参詣するのも最後なのだ

問四 3 恨めしく思わないでくれよ

4 何かわけがあるのだろう

問五

薄衣を盗んだことが人に見つかってしまつて、自分を追いかけてきたのにちがいない、ということ。

問六

観音のお告げで薄衣を盗み、その衣を着ていたので、身分の低い女性と思われて美濃の国の裕福な男に保護され、男の亡

（10点）

（7点）

（10点）

問四

助詞・助動詞といった細部にも注意して訳す

多義語を文脈に沿って訳す

問六

解答を見直して、意味が通る文章になっているか確認する

き妻に似ていたために気に入られて、男の妻となって幸せに暮らした。(88字)

解説

今回の文章の概要

強い信仰心をもった女が、初瀬の観音から靈驗を得て幸福になる

・東の京に、頼りにできる者がいない若い女がいた

・女は初瀬の観音のもとを毎月参詣したが、三年が過ぎても靈驗は現れなかった

・参詣を重ねたことから女の経済状況はますます悪化し、世間の人々は女の悪評をたてた

・女は、貧しさのあまり参詣の用意もできなくなってきたので、「今回で最後にしよう」と心に決めて参詣した

←

・参詣した夜、女が仏前で横になっていると、夢に僧が現れた

・僧は「後ろで寝ている女房の薄衣を取って帰りなさい」と言った

・女は夢から覚めて、「人の物を盗むとはあきれたことだが、何かわけがあるのだろう」などと思って後ろを見ると、寝ている女房が本

当にいた

・女は女房から衣を取り、衣を着て寺を出た

←

・女が初瀬川の辺りまで出た時、女の後ろから馬に乗った人々がやってきた

・その中の一人が、「前方にいるのは女のようなだが、夜更けに一人

出歩いているのは何か事情がありそうだ。衣を着ているので素性は悪くないだろう。馬に乗せて、明るいつもまで送ろう」と言った

・女は恐ろしく思ったが、観音を頼みに思つて馬に乗った

・夜が明けてきたとき、男が女の顔を見ると、病気で亡くした最愛の妻とそっくりだった

・男は妻の生まれ変わりを見つけたと喜び、女を自分の家に連れて帰った

←

・男は、美濃の国の裕福な人物であった。女は生活に不自由することがなくなり、男と夫婦になって長い年月を送った

☑ 文脈に沿って語句を訳せたか

問一 語句の意味を問う問題。文脈に即して解釈しよう。

a 「かきくらす」は、漢字をあてると「掻き暗す」となり、〈辺り一面を暗くする〉の意。ただし、傍線部は「女」の心情を描写した箇所なので、文脈に合わせて、〈心が暗くなり、悲しみの涙にくれる〉〈涙で目の前が暗くなる〉などと心理的な意味を訳出しなければならない。

「るる」は助動詞「る」の連体形で、ここでは自発の意。訳出の際は、「自然と」などの語を補つて、自発の意味であることを明示しよう。

b 現代語の「やおら」は、動作がゆったりと落ち着いているさまを表し、〈おもむろに・悠然と〉などの意味となるが、古語の「やおらは、目立たないよう物音を立てずに動作をするさまを言う。ここでは眠っている女房から衣を盗むのだから、〈そつと・静かに〉と訳出す

るのが適切である。

c 「さらなり」の「さら」は、ある物事が、すでに行われたことの繰り返しであるという様子を表し、「さらなり」で「わかりきったことだ・言うまでもないことだ」の意になる。現代語の「いまさら」という副詞は、この「さらなり」がもとになっている。

d 古語の「やがて」は、事柄や時間が隔たりなくつながっている様子を表し、〈①そのまま ②すぐに・さっそく〉といった意味である。行為・状態の継続を表す場合には〈①そのまま〉、すばやい変化を表す場合には〈②すぐに〉の訳が適する。ここはどちらでも意味は通じるが、①では〈着たまま出ていった〉となるのに対し、②では〈すぐに出ていった〉となる。前後の文脈を考えると、女が「衣ひききていねたる女房」の衣を盗んで着る場面なので、女は〈見つからないように早く出ていかなければ〉という気持ちにせかされていると言えよう。したがって、〈②すぐに〉とする方が、より場面に合った訳になる。

☑ 文脈を踏まえて傍線部を解釈できたか

問二 「もてあつかひけり（＝扱った）」の主語は「人」であり、「もてあつか」われるのは、主人公の「わかき女」である。「人」は、文脈によって、〈①世間の人 ②恋人・夫 ③立派な人・適当な人〉などさまざまな訳し分ける必要がある語だが、ここは〈①世間の人〉という意である。また、「口やすから」の「口」には〈話しぶり・物言い〉といった意味があり、「やすし」は〈平穏だ・不安がない〉の意で、それが打消の「ず」で否定されている。よって「口やすからず」は〈話しぶりが（女にとって）穏やかではない〉となる。前文に、「いよいよ

よそのふところ（懐）もせば（狭）くぞなりまさりける（＝ますますその経済状況も逼迫さを増した）」と女の厳しい経済状況が記されているので、傍線部は、〈（女が一人で貧しい生活を送っていると、）世間の人がさまざまな言う〉という内容なのだ。女にとって快くないことを世間の人が言ったのだと解釈すればよい。正解はウ。他の選択肢は、いずれも「口やすからず」の解釈が誤っている。

☑ 言い換えられている内容を押さえられたか

☑ 文脈から適切な語を補って訳せたか

問三 傍線部を直訳すると、〈今回は最後ののだ〉となる。設問には「言葉を補って」と指示があるので、「何が」最後ののかをはっきり書く必要がある。傍線部と同じ段落の冒頭に述べられている、女の心中に着目しよう。「このたびまゐりて、身のほどもうれへはて侍りなば、いまはさてこそはやみなめ（＝今回参詣して、自分の身の上（のつらさ）を訴え終えましたならば、今はもうそれで終わりにしよう）」（5・6）という箇所から、「まゐ」ることが最後ののだとわかる。解答は〈今回で初瀬に参詣するのも最後ののだ〉となる。

☑ 助詞・助動詞といった細部にも注意して訳せたか

☑ 多義語を文脈に沿って訳せたか

問四 3 「な」は副詞、「そ」は禁止の終助詞。「なくそ」の形で、おもに〈くしないであれ・くしてくるな〉という願望を含む禁止を表す。また、最後の「よ」も忘れずに口語訳すること。「よ」は相手に念を押す意味の間投助詞である。ここは、これまで女の嘆きを何ひと

つ聞いてやれなかったことに対する観音の弁明なのだ。

4 名詞「やう」は文脈によってさまざまに訳し分ける必要のある多義語。主な意味は、①様子・状態 ②様式 ③方法・手段 ④事情・理由・わけ ⑤こと・内容」である。

傍線部「やうこそはあるらめ」は、「やう」を④の意で解する慣用表現。〈何かわけがあるのだろう・何か事情でもあるのだろう〉などと訳せばよい。観音のお告げが「薄衣を盗め」という予想外の内容だったので、女は驚きつつも〈何かわけがあるのだろう〉と思った、という文脈である。「らめ」は、現在推量・原因推量などの意味をもつ助動詞「らむ」の已然形で、係り結びをつくる係助詞「こそ」の結びとなっている。

☑ 文脈を押さえられたか

問五 「さればこそ」は、〈思った通りだ・案の定だ〉という意味を表す慣用表現。何か思った通りなのか、文脈から読み取ろう。ここは、寝ていた女房の衣を取って寺を出た女が、後方から人々が騒ぎながらやってきた際（ℓ18「うしろに物いとのしりてきければ」に〈思った通りだ〉〉と思った、という場面である。つまり、**盗みが見つかった人が追いかけてきたのだと思った**、ということだと読み取れる。この点をもとに解答を作成しよう。

☑ 古文の典型的な展開を踏まえて読めたか

☑ 解答を見直して、意味が通る文章になっているか確認したか

問六 最後の段落に着目。女は最終的に、**美濃の国の裕福な男に「ま**

たなくいみじきものに思」**われ、「何事ももしき事な」く暮らすよ**
うになったのである（ℓ25・26）。「いみじ」はここでは〈大切な〉という意。「ともしき」には、「羨し」と漢字をあてて〈うらやましい〉という意になる場合と、「乏し」という漢字をあてて〈不十分である・貧しい〉という意になる場合の二通りがあるが、ここでは後者の意味で**〈何事にも不自由することなく〉**のように訳す。

女が「最後にはどうなったのか」については以上の通りだが、設問には「経緯を明らかにして」という指示があるので、まず、男が女を**美濃の国まで連れて帰った理由として、女が亡くなった最愛の妻にそっくりだった**（ℓ23・24「人かほみゆるほどにて……つゆもたがはず」ということを押さえる。

また、男が女に声をかけようと思ったきっかけが、**女が観音の指示によって盗んだ「うす衣」にある点**もポイントなので、これも解答に盛り込もう。男は、衣を着て歩く女に気づき、身分の悪くない女のようなのに、こんな夜更けに一人で歩いているのは何か事情がありそうだが、危ないから明るところまで送って差し上げよう（ℓ20～22「あのさきにみゆるは……おくりきこえん」と思い、声をかけたのである。以上の内容を指定字数内でまとめよう。

☑ 「夢のお告げ」のパターンに当てはまる。お告げの内容と登場人物の行動とを把握し、そのあとにどのようなできごとが起こったのかを読み取ろう！

全訳

そう遠くない昔、東の京に、頼る者のない（身の上の）若い女がいた。世間によくある宮仕えなどもしたが、（固い将来の誓いというほどでもない）当面の生活の助けとなる程度の機会にも出会うことなくただ日々だけが過ぎた。このような状態だったので、（女は）毎月初瀬の観音に参詣して、いろいろと身の上（のつらさ）を嘆き訴えておりました。こうして、三年後の冬にもなってしまったが、まったくその霊験は現れてこない。なんとと言っても、容易ではない観音参りへの旅路であるので、ますますその経済状況も逼迫さを増した。また、世の中のならわしで、1世間の人も口汚く（女についての）悪評を立てた。

さて、この女は、「それほど（＝何度お参りしても、霊験が現れないこと）であっては道中の用意も、できなくなってきたので、今回参詣して、自分の身の上（のつらさ）を訴え終えましたならば、今はいはもうそれで終わりにしよう。世間の人が（あれこれと）言うのも当然のことだ」などと思うより早く、涙にくれて悲しい気持ちでいました。さて、いつもの時よりも心を正して（初瀬に）参詣した。「2今回で

（初瀬に参詣するの）最後ののだ」と思うと、粗末な木や草までも目にとまって、a涙で自然と目の前が暗くなることはこの上ない。

さて、その夜、涙に濡れた袖の上に一人で寝て、御仏の前でうたたねというのでもないが横になってしまった。（その）夢の中に、僧で、たいそう尊く、年齢も重ねて、徳を極めたと思われる方が、出てこられて、「（そなたの身の上を）かわいそうに思っているのだよ。（これ

までのことを）3恨めしく思わないでくれよ。そなたの後ろの方に寝ている女房の薄衣を、bそつと取って着て、すみやかに起き上がりて帰りなさい」とおっしゃられることがあった。夢から覚めて思うことには、「あきればてたことよ。最後には、人の物を盗むほどの因果な身の上でさえありましたよ。たとえ盗んだとしても、衣一つはどれほどのもの（＝生活の足し）になるというのでしょうか（いや、何にもならない）」とは思うが、「そうかといって、4何かわけがあるのだろう。これほどに身を預けて参上します効果としては、たとえ見つけられてどのような恥を経験するとしても、せめてそれだけでも仏への奉公（の証）にしよう」などと思って、後ろの方を見ると、本当に衣を引きかぶって寝ている女房がいる。そつと（その衣を）引き落として取ると、c言うまでもなく、仏のお取りはからいなので、どうして他の人が気づくだろうか（いや、気づかない）。

さて、（衣を）取って着て、dすぐに（寺を）出てしまった。胸がどきどきして、つらくせつなくて悲しいけれども、気をとり直して、初瀬川のあたりまで出てきてしまった。（その時）後方でもとても騒ぎながら（人々が）やってきたので、「ああ悲しいこと。5思っただ通りだ」と思つて見ると、この（女の）ことを怪しむであろう人ではなくて、馬に乗った人々がたくさん（初瀬から）帰ってきたのだろう。

さて、この馬に乗っている男が言うことには、「あの前方に見えるのは、女房でいらっしゃるようだ。どうして夜更けにただ一人で歩きなさるのだろうか（何か事情があるのに違いない）。衣などを着ているのは、（素性は）格別に悪くない人でありましょう。あの人をひきとめ申し上げよ。馬に乗せて明るいようなところまで送り申し上げ

よう」と言った。さて、供の男が、（女のところに）走りついて、このことを言ったところ、（女は）何となく恐ろしいけれど、ただ仏を頼みにして、「そういうことなら、そのように」と言って、（男の）馬に乗ってしまった。夜もほのかに明けてきて、人の顔が見えるころになって、（男が）この女を見ると、自分が深く愛していた者で、病気を患って死んでしまった者と、まったくそっくりであった。（男は、愛する妻の生まれ変わりを見つけることができた、と）喜んで（この女を自分の家に）連れて行った。

（この）男は美濃の国の、人々から尊敬されている（裕福な）人物でありました。（だから、それからの生活は）何事にも不自由することとはなかった。そうして、（男は）この女をこの上なく大切な人と思つて、（夫婦になって）長い年月を送ったのだった。

まとめ

- ・ 文脈に沿って語句を訳す
- ・ 文脈を踏まえて傍線部を解釈する
- ・ 言い換えられている内容を押さえる
- ・ 文脈から適切な語を補って訳す
- ・ 助詞・助動詞といった細部にも注意して訳す
- ・ 多義語を文脈に沿って訳す
- ・ 文脈を押さえる
- ・ 古文の典型的な展開を踏まえて読む
- ・ 解答を見直して、意味が通る文章になっているか確認する